



No.79 2006・4・11

発行 石川県立歴史博物館

〒920-0963 金沢市出羽町3番1号

TEL.076(262)3236 FAX.076(262)1836

<http://www.pref.ishikawa.jp/muse/rekihaku/index.htm>



ISHIKAWA-KEN
HISTORY
MUSEUM

れきはく



石川県立歴史博物館開館20周年記念

加賀百万石の道

戦国から太平へ

会期 4月22日(土)～5月28日(日)

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) 会期中無休

入館料 一般650円(520円) 大学生500円(400円)

高校生以下無料 ()は20名以上の団体料金



あおらしやつみほとけにまいどうくそく

五代藩主前田綱紀御召初め具足(青羅紗包仏二枚胴具足・京都井伊美術館保管)

ゼミナール

聴講は無料ですが、展示室をご覧になる場合は有料となります。

日時 5月20日(土)

場所 当館学習ホール

演題 「前田家と武具」

講師 当館学芸専門員 長谷川孝徳

列品解説

有料となります。

日時 4月29日(土・祝)午後2時から3時30分
当館学芸専門員 長谷川孝徳

日時 5月13日(土)午後2時から3時30分
当館学芸専門員 長谷川孝徳

平成十八年度春季特別展

「加賀百万石への道」

～戦国から太平へ～

に寄せて

工芸王国への道

“美術工芸王国石川”という言葉をよく耳にします。石川県内を眺めると、漆器では輪島塗・山中塗・金沢漆器、焼物では九谷焼・大樋焼、仏壇では美川仏壇・金沢仏壇・七尾仏壇など、また、金沢金箔、加賀友禅、桐工芸等々、確かに伝統工芸と呼ばれるものが数多くあります。その県庁所在地の金沢には、東京、京都と並んで美術倶楽部もあるのです。

終戦直後の昭和二十（一九四五）年十月十三日、本多町の北陸海軍館で第一回現代美術展が開幕し、会期二十五日間で四万人を超える入場者がありました。なぜ、それほど美術や工芸などへの関心が高いのでしょうか。それは、やはり今まで言い尽くされたとおり、“加賀藩の文化奨励策”や“加賀藩御細工所の存在”の影響が大きかったといえるでしょう。そして、文化奨励にしても御細工所の存在にしても、地場産業だったことが後世に影響を与えたのです。つまり、生活と密着した形で美術品や工芸品が育てられ、それにたずさわる職人が育ったのです。加えて、江戸時代に学問を“実学”として発展させ、加賀出来の製品を加賀ブランドとして世に出し、結



今枝家伝来 金小札白糸威二枚胴具足（京都井伊美術館保管）

果的に産業振興に結びつけたことが、地場産業から伝統産業・工芸への道を作ったといえます。

利常としつねと綱紀つなのりの文化形成

寛永八（一六三一）年十一月中旬、江戸より三代藩主前田利常のもとへ「前田謀叛」の噂が伝わりました。世に言う「寛永の危機」です。その頃、加賀藩では新参の侍を召し抱え、大坂冬の陣、夏の陣の戦功者の追賞、火災後の金沢城の修築などが行われていました。さらに、二代將軍徳川秀忠が病で床に

月二十五日、利常は嫡子光高みつたかを連れて金沢を出発、十二月十日に江戸に着き、重臣の横山大膳たけざんが老中土井利勝に弁明しました。これが成功して何とか事なきを得たのです。

この利常にはいくつかの奇行伝説があります。その一つが鼻毛をのばし、阿呆殿様の真似をしていたというものです。真偽の程は別として、幕府への忠節を疑われないための方策が伝説を生み出したのでしょう。しかし、実際の利常は加賀藩の基礎を固めた人物であったのです。家督を継いだ利常には二つの課題がありました。一つは幕府との安定関係を保つこと、もう一つは農政の確立でした。前者は阿呆



不破家伝来 和製南蛮胴具足わせいなんばんどうぐそく（京都井伊美術館保管）

殿様を演じることでお家保存に努め、幕府との関係を築き上げ、後者は「改作法」という加賀藩独自の農業政策を施行することにより、領国経営の安定を図ったのです。しかも、この改作法は全国の最先端の農政体制でした。

この政策の終局の目的は、最大限の財源獲得と増収でした。こうして獲得した財源で、文化・工芸政策にも力を注いだのです。現在に残る伝統工芸・美術品の基礎の多くは、利常の奨励政策によって生まれたものと言っても過言ではありません。さらに、書籍・典籍の収集をはじめ、殿舎・庭園の修築、領内の社寺建築・造営を行いました。また、茶道では小堀遠州、刀剣では本阿弥光甫、能では金春・宝生

の両大夫、絵画では依屋宗雪・狩野探幽らと交流があり、金沢は江戸に勝るとも劣らない文化を形成する基礎が築かれました。

四代光高は父利常に先だったため、利常は隠居をしていますが五代綱紀の後見となりました。綱紀は祖父利常の事業を発展大成した後継者でした。綱紀の業績としてあげられるのは、諸制度の完備でした。例えば、利常が施行した改作法を加賀藩の基本法として完成したことなどです。また、職制・軍制の整備も行いました。行政組織は、老臣の寄合を中心とする臨時的なものから、幕府機構に倣って、年寄・家老・若年寄を中心として整備し、軍制も平時の行政機構が戦時には軍事態勢に移行できる体制

に、綿密に整備されたのです。

殖産興業は、改作法の完成を第一として、各種工業から美術工芸に至るまで、綱紀の時代に大成したものが多くあります。御細工所もその一つです。御細工所では、藩主や藩士の注文に応じ、さまざまな物を製作していました。

武器などは、はじめは軍備として造られていたが、やがて工芸的要素が強いアクセサリーの存在のものが注文されるようになっていきました。

当然、それらには漆工・金工のほか、染織や皮革などの技術も必要とされたのです。そして、こうして集積された技術が、今日の伝統工芸を生み出したのです。（当館学芸専門員 長谷川孝徳）



前田慶寧指料「白澤拵」鐺よしやすさしりょう はくたくこしらえ つば



前田慶寧指料「白澤拵」目貫よしやすさしりょう はくたくこしらえ めぬき（個人蔵）



博物館の舞台裏

学芸員のエアポケット

今年(2019年)は石川県立歴史博物館開館二十周年と、韓国国立全州博物館姉妹館提携十五周年というメモリアルイヤーに当たります。この秋には、姉妹館提携十五周年を記念して「韓国文化への誘い 全羅北道の歴史と文化」展が開催されることになっています。



いわゆる因縁の韓国池山洞32号墳出土金銅製冠

平成二年初めて韓国と係って以来悲喜こもこもの思い出がありますが、十五年が経過した今でも時々夢でうなされる出来事について、懺悔の気持ちを含めてここに記したいと思います。

平成二年十月、石川県立歴史博物館全館完成記念特別展「魅惑の日本海文化」が開催されることとなり、平成元年から韓国国立中央博物館と資料の出品交渉を重ね、石川県では初めて海外からの資料を借用して大規模な展覧会を開く準備が整ったわけです。右も左もわからない韓国でようやく資料交渉が終わり、ホット一息ついたそのとき悪夢のような事態が起きたのです。展覧会開始一週間前に、資料を受け取りに当時の副館長と高橋の二名がソウルの中央博物館へおもむき資料のチェックと梱包確認を終わり、互いの労をねぎらって無事金浦空港から小松へ輸送し、歴史博物館の展示室まで運び込み、いよいよ展示作業を始めたその時、展示室で悲鳴が上がったのです。何事が起こったのかと思えば、ポスターや図録の表紙を飾る展覧会の目玉資料である韓国池山洞三十二号墳出土の金銅製冠が見当たりません。血の気が引くとはまさにその時の事でした。石川県から二名、韓国側も当時の考古部長以下四名の職員が立ち会って入念な資料のコンディショニングや梱包作業に当たっていたのですが、誰一人として漏れに気づかず作業を進行させたのです。あわてて受話器を握り韓国へ電話すると、韓国側も申し

訳なさそうに、実は韓国側の集荷ミスで、当日ソウルの中央博物館に集荷しなかったとの事、いわば日韓双方のダブルミスでこのような事態を引き起こしたのでした。しかしなんといつてもチェックした石川県側の落ち度は言い逃れのできない大失態で、展覧会開会初日を三日後に控え、翌日急遽名古屋空港からソウルへ向かい、平身低頭で平謝り、資料を手持ちで運ぶ段取りを整えた次第です。韓国側も資料の集荷を急り、大変申し訳ないとのことで両者痛み分けということで一件落着きました。まさに日韓双方エアポケットに落ち込んだような気分です。今でも当時の韓国側担当者とその話になると冷や汗をかいています。ただ幸運なことに、出品をお願いしていた冠は複製品であったため手荷物として機内に持ち込むことができました。本物の冠なら出入国の税関を通ることができず、お手上げの状態だったと思いますが、悪運が強いと言うか、神仏の加護と言うか、十月六日には無事展覧会がオープンし、本当に九死に一生を得た心持で当日の朝を迎えました。機内でもしつかりと木箱をひざの上に抱え一時間三十分の飛行時間をまんじりともせず過ごしたことが思い出されます。

その後も海外との交流展でいろいろな事態(飛行機乗り遅れ事件等)に遭遇しましたが、このときの経験があったればこそ何とか切り抜けられたと思います。今後ともこの苦い経験を忘れず博物館の国際交流に微力を尽くして生きたいと思っています。

(学芸課長 高橋 裕)

コイダル

博物館で「におい」展示します?!

三月二十一日に終了しました「新収藏品展」では、「織田信長朱印状」「畠山義経関係文書」など注目の資料が出品され、多数の方に「来場いただきました。その「新収藏品展」の展示作業の時のことです。作業はほぼ終了、ケースを閉めて、さあオープンを待つだけ…、となった時、「なんか匂わんか?」と、資料課T課長が声を上げました。そう言われてみれば展示室にほのかに漂う異臭…。においの元をたどってみると、展示室の奥に設けた民具コーナーに疑わしい資料が。そう、かつて下肥を田畑へ運ぶのに使った「コイダル」がにおいを発し、その存在をアピールしていたのです。

科学肥料が普及する以前、人の糞尿は農家にとって大切な肥料でした。家でためた下肥は、肥桶に入れて農地に運びます。家から比較的近い田畑に運ぶ際は、ふたのない一対の桶を天秤棒で担ぐのが普通でした。これが遠方になると、いわゆる背負梯子などをを使って背負う方法が取られます。この時の桶は運びやすいように楕円形で、ふたのある樽のような形状でした。今回寄贈していただいた「コイダル」は、その名のとおり後者に分類され、高さが約六十センチ、幅が四十センチほどあり、昭和十年代まで使用されていたものです。使用されなくなってから

かなりの時間が経っていますし、博物館に収蔵する際にもクリーニングをしましたが、木に染み付いた肥のにおいは簡単には取れなかったようです。

しかし「コイダルのにおい」も考えようによっては資料の一つかもしれません。そのにおいから、下肥を背に担いで運ぶ大変さ、難しさや、当時の農作業の様子が想像できるような気がしました。経験の無い人（私も含め）にとつては、資料を見るだけではなかなか実感できないものです。また農村部で暮らしていた高齢者の方にとつて、肥のにおいはむしろ懐かしいものかもしれません。人間の記憶には、色や形ではなく「におい」が最も残りやすいと言われますし、海外の福祉の現場では、お年寄りが「懐かしい」と感じるにおいの瓶詰めが作られ、高齢者の心のケアに役立っていると聞きます。「コイダル」のにおいにも、同じように記憶に働きかける効果があるのでは…。

それらのことを考慮して（かどうかは不明ですが）、展示はそのままオープンしました。ところが「コイダル」のにおいは室内空調によっていつの間にか拡散し、気づく人はほとんどいなかったようです。苦情が出なかったことにほっとしつつ、少しだけ残念な気もしています。博物館資料とにおい、これからのように保存し役立てていくか、ちょっと面白い分野ではないでしょうか。

（学芸員 大井理恵）

コイダル

俳句と私

昨年度の秋季特別展が「加越能の俳諧」でした。展覧会が始まる前から自分自身が芭蕉になった気持ちになり、何かとあれば句をよみメモに留めました。処女作が「トチ餅や 残り一つが 我が口に」でしたが、季語が入っていないということで酷評されました。

でもそれにもめげず、続いて次々とメモも増えだし、その幾つかを紹介しますと

赤煉瓦 歴史を刻む 秋の風

木の葉散る 本多の森や 冬近し

銅鐸の 古代の音や 柿一つ

加賀繡いや 多彩な技の 秋模様

盃に ゆらゆら揺れる 宵の月

など、ほかきりが無いほど夢中となりましたが、やはり俳句になっていないと笑われるのが落ちでした。

展覧会の会期中、ワークショップの一つとして実施しました「俳句と遊ぼう」のコーナーは、芭蕉や千代の句に絵を描いたり、自作の句に絵を描く内容でしたが、誰でも気軽に参加でき、小中学生にも大変人気を呼びました。それらを見てみますと、さすが小中学生らしい感性で、純粹な句が多く見受けられると同時に、楽しんで参加していることがよくわかり、おおいに参考となりました。

今後も、俳句人口が増えることを願っています。

（副館長 北 春千代）

れきはく催し物案内（予告）

企画展 モダンの調べ

鞍信一蓄音機コレクション

六月十日（土）～七月九日（日）
明治・大正・昭和・モダンな生活を語る蓄音機の魅力を、鞍信一コレクションの中から紹介し、合わせて懐かしいSP盤による「モダンの調べ」の実演も行います。



バスツアー「立山方面」

六月二十二日（木）
信仰の山、立山を訪ねます。
詳細はメイト情報にて、ご案内します。

歴史散歩とバスツアーは、れきはくメイト会員のみの参加となります。まだ入会されていない方は、この機会にぜひともご入会ください。なお、会員になりますと、様々な特典があります。会費は千円で、当館総合カウンターで受付を行っています。

れきはくセミナー 予定

学芸員が、歴史に関する様々なテーマを取り上げます。
時間 いずれも午後二時から三時三十分
受講料 無料 どなたでも聴講できます。
会場 当館学習ホール

五月二十日（土）講師 長谷川孝徳
内容「前田家と武具」

六月十七日（土）講師 本谷文雄

内容「オリンピックの文化史 日本人の活躍と苦悩の百年」

七月十五日（土）講師 大門 哲

内容「金沢の『縁切り』信仰」

常設スポット解説 毎月第一月曜日に開催

入館料が必要となります

五月八日（月）講師 高橋 裕
内容「土偶の謎 母子像形土製品」

休館日のお知らせ

四月二十日（木）・四月二十一日（金）/五月二十九日（月）～六月二日（金）は
展示替やくん蒸消毒作業のため、休館日となります。

六月五日（月）講師 三浦俊明
内容「古代の対外交流」

七月三日（月）講師 永井 浩
内容「律令時代の加賀・能登」

次回 夏季特別展のお知らせ

伊勢神宮の神宝

七月二十九日（土）～九月十八日（月・祝）

日本人の心の故郷とも言われる伊勢神宮の式年遷宮に奉納された絢爛豪華な調度品や装束、御神宝の数々を北陸で初公開し、逢かな時を越えてきた日本人の美と心を見つめます。

お知らせ

活性化事業の一環として、正面受付横に、歴史コース・民俗コース・科学技術コース・体験コースに色分けされたパネルボードを設置しました。合わせて、当館のパンフレットも一新しましたので、来館の折にお受け取りください。

編集後記

また、桜の季節となりました。そして新しい年度に入りました。平成十八年度は、当館が今の場所に開館してから二十年という節目の年になります。そこで三回の特別展にはすべて開館二十周年の冠を付けて開催します。

この節目の年に博物館の活性化事業の一環として常設スポット解説を新たに始めます。常設展示品の中から一点を選び、学芸員が深く掘り下げて解説しますので、ご期待ください（入館料が必要となります）。また、特典いっぱいメイトの募集も引き続き行っておりますので、ぜひともご入会ください。（詳細は普及課まで）